

迷ひ、煩悶に煩悶を重ねて、豁然として悟る處があつて、始めて自己獨創の立派な繪も出來やう。他人の描法や何かを、眞似てばかり居て、自分がラクをしてゐては、何時になつても獨立した畫家にはなれぬ。

愚にもつかぬ事

を聞いたがるな

此色は何と何とて出來たかの、此繪は何時間かしたかのと、世の中には愚にもつかぬ事を聞きながら連中が随分澤山ある。繪の良否は時間の問題ではない、三十分で傑作も出來やう、十日も二十日もコネつかへして駄作に終るのもあらう。一の色をつけるに、何と何と規則の様に極めて置く者はなからう、また一々記憶して置く必要もない、汚ない水で、汚ない筆で、アチコチの繪具皿を突つき廻して色を調合するのだ、よし、この色とこの色と、教へた處が、同じ色が出るものではない、出た處でそれを眞似て何にする、こんなクダらぬ質問なんかする間に、鉛



カッサン氏鉛筆臨本の内

筆のスケッチの一枚もやる人が屹度成功する。

教師を頼つてはいけぬ

ヨク／＼困つて、自分で始末にゆけぬ時のほかは教師に聞くな、何でも一生懸命繰返し／＼研究すれば大テイの事は分つて來るに極まつてゐる、一にも

二にも先生先生と教師ばかりを頼つてゐるとイツ迄たつても獨り歩きは出來ない。

△ △ △

畫かきの中には、實地其場處に臨み、詳しく寫した精密な畫稿から描き上る者もあり、又た同じ場處を、其場所て受けた強い印象を根據として、全く記憶から描き上る者もある。しかも後者の方が、たとへ其場處の細部には適はずとも、性格と相貌を與へる上に於て、遙かに前者に勝つてゐるかも知れん。繪を描くには、深く感じる事が必要である。(岩村透氏著『樂亭閑話』)